



Sense Island -感覚の島- 暗闇の美術島 2022

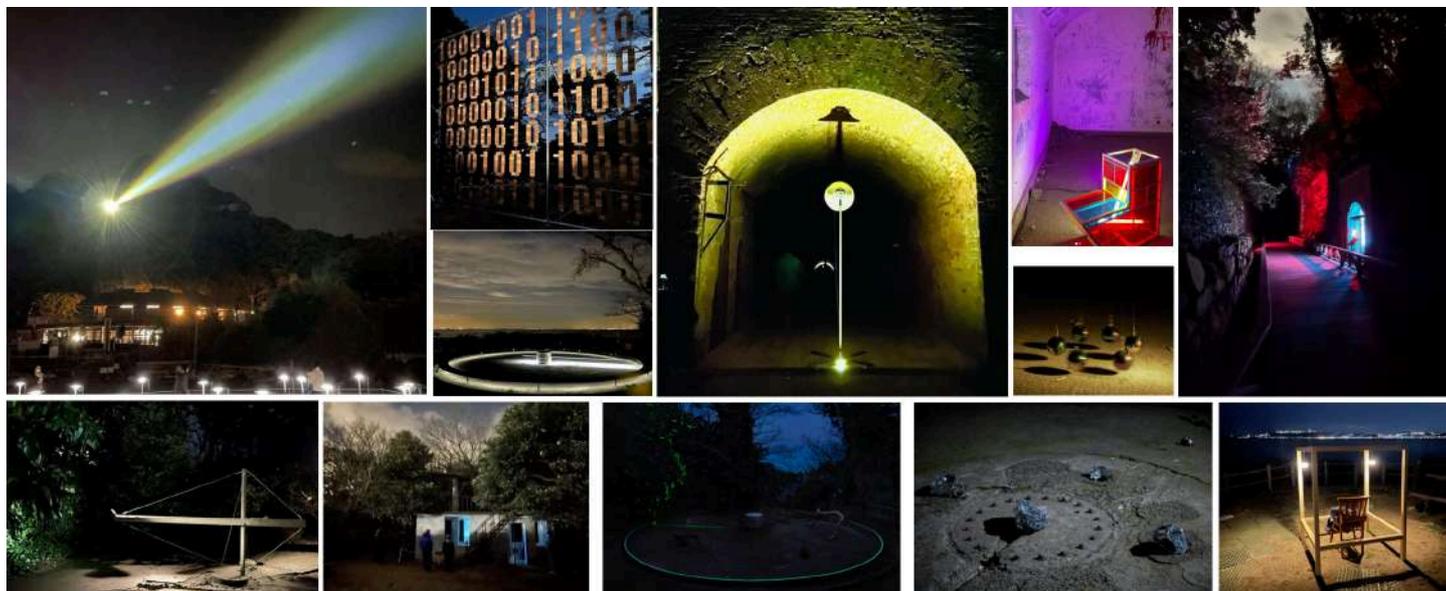
Sense Island Sarushima Dark Museum 2022

2022年のテーマは「Behave (感覚行動)」

Sense Island は、横須賀の無人島「猿島」を舞台に2019年は秋に、2020年はコロナ禍による延期を経て、2021年は冬に開催いたしました。携帯を封印し、暗闇の中で自分の感覚を研ぎ澄ませて猿島の自然と作品と対峙するこの芸術祭は、人との対峙ではなく自然と時間と感覚に向かい合う唯一無二の芸術祭として実施することができました。

テクノロジーや時間の概念を取り払い、猿島にある自然の文脈を感じ自分自身と向き合うような作品や体験を通して、元々私たちが持っていたであろう”感覚”をもう一度取り戻したい。これまでの Sense Island のコンセプトを基礎に、今年は来訪者の感覚を最大限にひらくために「Behave (感覚行動)」をテーマに作品やパフォーマンスなどを展開していきます。

今年は猿島だけではなく街側にも作品やプロジェクトを展開し、横須賀全体に感覚を広げられるプログラムを企画していきます。



Sense Island 2021 の展示風景

開催概要

- タイトル Sense Island -感覚の島- 暗闇の美術島 2022 (英語表記: Sense Island Sarushima Dark Museum 2022)
- 開催日時 一般会期 2022年11月12日 [土]~12月25日 [日] 会期中の金土日および祝日 *21日間
内覧会(予定) 2022年11月9日 [水] *荒天の場合は11月11日 [金]
- 開場時間 17:00-21:30
- 会場 横須賀市猿島 (神奈川県横須賀市猿島1番)
- 料金 一般 大人(高校生以上)=3,700円 小・中学生=1,700円 / 横須賀市民 大人(高校生以上)=2,700円 小・中学生=1,200円
*小学生未満無料(要事前予約) *身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付添人1名までは無料(要事前予約)
- URL <https://senseisland.com>
- 主催 Sense Island 実行委員会 (横須賀集客促進・魅力発信実行委員会、株式会社アブストラクトエンジン、株式会社トライアングル)
- 助成 令和4年度文化資源活用推進事業
神奈川県川崎競馬組合が主催する「川崎競馬」の利益配分金を活用した神奈川県市町村自治基盤強化総合補助金対象事業



- 特別協賛 株式会社 博展、パナソニックコネクト株式会社
- 協力 ArtSticker (株式会社 The Chain Museum)、ウシオライティング株式会社
- 参加アーティスト (50音順・詳細は別紙にて): 齋藤精一、齋藤帆奈+脇坂崇平、TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH PROJECT (梅沢英樹、オウ・シャオハン、川島崇志、小山泰介、村田啓、森田友希、山本華、Ryu Ika、金秋雨)、中村寛+原田祐馬、
- タイアップアーティスト HAKUTEN CREATIVE、中村ゆめお (ArtSticker 株式会社 The Chain Museum)、石毛健太 (ArtSticker 株式会社 The Chain Museum)
- パフォーマンスアーティスト: 梅川杏ノ介、エルムホイ
- 会期中イベント 順次発表予定



1. 齋藤精一
JKI #006 YOSHINO 撮影: 都戸ユウタ



2. 齋藤帆奈
3. 齋藤帆奈 Swing of Life (2010)
4. 齋藤帆奈 Substitutional Reality System. Schei Wakisaka+Keisuke Suzuki+Naoataka Fuji



TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

5. TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH
梅沢英樹、オウ・シャオハン、川島崇志、小山泰介、村田啓、森田友希、山本華、Ryu Ika、金秋雨
6. YURAKUCHO ART SIGHT PROJECT VOL.1 by Kosuke Nagata, 2020



7. 中村寛+原田祐馬
8. 中村寛 芸術の授業
9. 原田祐馬 '何もかも' dot architects + UMA/design farm



10. 石毛健太
11. 石毛健太 Until September 12
12. 中村ゆめお
13. 中村ゆめお 彼ら



14. HAKUTEN CREATIVE



15. HAKUTEN CREATIVE Prism(2019) photo: Akira Arai



16. 梅川志ノ介 photo: Leslie Kee



17. 梅川志ノ介 長根 静と智盛



18



19

18. エルムホイ
19. エルムホイ 埋立地 photo 藤倉麻子

プロデューサーメッセージ

今、あなたには何が見えますか？

今、あなたには何が聞こえますか？

今、何に触れていて、そこから何が伝わってきますか？

人類へと続く種が誕生してから500万年、人類としての活動が始まってから約1万年。

人間は周囲の自然やそのルール、到底かなわない力やさまざまな恵みと共に変化し続けてきました。

文明の進化と言われる大きな変化は、自然や生物としての人間の本能をも超えつつあり、環境破壊やそれによって起こる気候変動の影響は歴史上あまりにも大きく、地質学的に「人新世 | アントロポセン」人類中心の時代となったとも言われています。

もう一度人間が、感性豊かな生物であることを多くの人に感じてもらいたい。

アートという創作物を通して、さまざまな感覚を呼び戻すきっかけを作ってもらいたい。

Sense Island - 感覚の島- はそんな考えから2019年に第一回目を開催しましたが、翌年にはコロナウイルスという未曾有の危機に全ての人とともに直面しました。

今現在でも「人間」という生物の存在がゆらぎ続けていることを痛感します。

東京湾で唯一の自然島である猿島に、普段足を踏み入れることのできない夜に、Sense Island は開催されます。猿島ではカメラやインターネットを遮断し、目、耳、鼻や皮膚から取り入れる情報だけを頼りに島内を巡り、音、光、カタチを発する様々な作品やパフォーマンスを通してもう一度、生物としての自分と自分の持っている本来の感覚を体感して欲しいと考えています。



SENSE ISLAND プロデューサー 齋藤 精一 (パノラマティクス主宰)

1975年神奈川県生まれ。建築デザインをコロンビア大学建築学科 (MSAAD) で学び、2000年からニューヨークで活動を開始。03年の越後妻有アートトリエンナーレでアーティストに選出されたのを機に帰国。フリーランスとして活動後、06年株式会社ライゾマティクスを設立。16年社内に設立された3部門の中のひとつ、「アーキテクチャー部門」を率いる。2020年ドバイ万国博日本館クリエイティブアドバイザー。2025年大阪・関西万博 People's Living Lab クリエイター。

東京湾要塞が残る自然豊かな無人島 猿島

三笠桟橋から東の海上1.7km先に東京湾唯一の自然島、猿島があり、片道約10分で渡ることが出来ます。

島の歴史は古く、縄文時代・弥生時代から古墳時代の石器や土器などが出土しています。

島内には明治時代の煉瓦造の掩蔽部（えんべいぶ）や弾薬庫、隧道などが良好に残っており、東京湾要塞跡として国の史跡に指定、日本遺産の構成文化財にも認定されています。

現在は、バーベキュー、音楽やアートのイベントなど、豊かな自然と歴史の中でプラスαの体験が楽しめる無人島として多くの人々が訪れ賑わい、よこすかルートミュージアムなどの観光ルートでも紹介されています。

よこすかルートミュージアムは、横須賀に点在する開国から近代につながる歴史、文化の見どころや自然豊かなスポットを「サテライト」と呼び、それらを「ルート」でつなぐことで市内全体を大きな「ミュージアム」としてとらえた横須賀の新しい楽しみ方です。無人島の自然と史跡を楽しめる猿島も、よこすかルートミュージアムの「サテライト」の一つです。

よこすかミュージアム <https://routemuseum.jp/>



全般お問い合わせ

Sense Island 実行委員会事務局(横須賀市文化スポーツ観光部企画課)
TEL 046-822-8427(平日9:00-17:00) senseisland.yokosuka@gmail.com

広報用画像などプレスお問い合わせ

株式会社いろいろ 担当：市川
press@iroiroiro.jp

Sense Island 2022 参加アーティスト一覧

齋藤 精一 Seiichi Saito



1975年 神奈川県生まれ。建築デザインをコロンビア大学建築学科(MSAAD)で学び、2000年からニューヨークで活動を開始。Omnicom Group傘下のArnell Groupにてクリエイティブ職に携わり、2003年の越後妻有アートトリエンナーレでのアーティスト選出を機に帰国。2006年株式会社ライゾマティクス(現：株式会社アブストラクトエンジン)を設立。社内アーキテクチャー部門『パノラマティクス』を率い、現在では行政や企業などの企画、実装アドバイザーも数多く行う。2018-2022年グッドデザイン賞審査委員副委員長。2025年大阪・関西万博 People's Living Labクリエイター。

ポートレート撮影：Muryo Honma (Rhizomatiks) 右：JIKU #6 YOSHINO 撮影：都甲ユウタ

齋藤帆奈+脇坂崇平 Hanna Saito + Sohei Wakisaka



左から齋藤帆奈、脇坂崇平
齋藤帆奈 Swing of Life (2010)
脇坂崇平 Substitutional Reality System
Sohei Wakisaka+Keisuke Suzuki+Naotaka Fujii

[齋藤帆奈]現代美術作家。1988生。多摩美術大学工芸学科ガラスコースを卒業後、metaPhorest (biological/biomedica art platform)に参加し、バイオアート領域での活動を開始。現在は東京大学大学院学際情報学府博士課程に在籍(寛康明研究室)。理化学ガラスの制作技法によるガラス造形や、生物、有機物、画像解析等を用いて作品を制作しつつ、研究も行っている。近年では複数種の野生の粘菌を採取、培養し、研究と制作に用いている。主なテーマは、自然/社会、人間/非人間の区分を再考すること、表現者と表現対象の不可分性。

[脇坂崇平]神戸大学内部観測研究室出身。理研 BSIにて現実と仮想が不可分な状況を実現する代替現実システムを開発し、ARS ELECTRONICAでの展示等、メディアアートとしての展開も行う。東京大学 RCASTでは身体スキル共有及び身体拡張手法の研究に従事。通底する研究テーマは、異なる階層に属する現象の混合により生じる創発。2022年度より慶應大学 KMDにて JST Moonshot Cybernetic being Project PM 補佐。

TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH PROJECT

梅沢英樹、オウ・シャオハン、川島崇志、小山泰介、村田啓、森田友希、山本華、Ryu Ika、金秋雨

TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH



東京フォトグラフィックリサーチは、2020年代を迎えた東京を出発点として、「都市の多角的なリサーチ」と「現代写真の実践的な探求」をコンセプトに、未だ見ぬ都市と社会と人びとの姿を可視化することを目的としたアーティスト・コレクティブ。写真家、美術家、メディア・アーティスト、音楽家、建築家、研究者、グラフィックデザイナー、編集者など、広く写真表現に携わる者達との協働によって、アートプロジェクトや展覧会、フィールドリサーチ、コミッションワーク、コラボレーション、国内外の美術大学との共同プログラムなど、多様な活動を展開している。

YURAKUCHO ART SIGHT PROJECT VOL.1 by Kosuke Nagata, 2020



梅沢英樹

1986年群馬県生まれ、東京藝術大学大学院美術研究科修了。環境の中で知覚する前言語的な感覚や、自然現象の複雑性への関心をもとにサウンド、写真などを用いた制作を行なう。近年の主な展示に「タイランド・ビエンナーレ コラート」(2021)など。ストックホルムの国立電子音楽研究所 EMSでの滞在制作や、Tokyo Frontline Photo Award 2018 グランプリなど受賞多数。

水戸芸術館でのパフォーマンス (2020) Photo : Alloposidae LLC



オウ・シャオハン

アーティスト。北京出身、2017年イタリアマチェラータ美術学院のイラスト専攻を卒業し、2021年東京藝術大学デザイン科 draw 研究室に入学。現在は東京を拠点に活動している。2018年群馬印社創立、2021年東京藝術大学デザイン科描画研究室入学。2021年第24回グラフィック「1_WALL」審査員奨励賞、2021年「旅しないカメラ」place M x Net Gallery 1st photo Contest 入選。

「東京夢遊 2021」より



川島崇志

写真家。1985年宮城県生まれ。2008年東京工芸大学芸術学部写真学科卒業、2011年同大学大学院芸術学研究科博士前期課程メディアアート専攻写真領域修了。2016年から2018年までオランダ・アムステルダムを拠点として活動し、20018年帰国。写真作家、商業フォトグラファー、大学教員として活動している。東京工芸大学芸術学部写真学科助教。自然現象や土地の記憶からはじまる「不在の物語」を主たるテーマとしている。自身が撮影した写真映像素材、ファウンドフォト、自動演算による画像合成、立体作品、文学作品から引用テキストなど多様なメディアを交え、空間を利用した大型インスタレーションを展開する。展覧会、受賞等多数。

A Crater Lake #001、描きかけの地誌 / 蒐集 2015



小山泰介

写真家。1978年生まれ。生物学や自然環境について学んだ経験を背景に、実験的なアプローチによる写真作品や映像作品を発表している。特に近年、現代における写真技術を「センシング」という観点から捉え、拡張した写真表現の可能性を探究している。文化庁新進芸術家海外研修制度により2014年から2年間ロンドンに滞在、その後アムステルダムを拠点に活動し、2018年より、現代の写真・映像表現によって都市と社会を考察する「TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH PROJECT」を主宰。国内外での個展・グループ展多数。

REVIVE #165, 2019



村田啓

写真家。1990年生まれ。2013年に多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻を卒業後、16年に東京藝術大学大学院美術研究科絵画油画専攻を修了。視覚やスケールの変容への興味に基づく、光の現象を特徴とした写真作品を中心に制作している。

Passing through the window



森田友希

写真家、映像作家。自己や他者の記憶のイメージを収集し、物語の構造をとりながら「不在」をテーマに写真や映像作品を展開。2016年「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD #5」グランプリ受賞。2017年、写真集「OBLIQUE LINES」をイタリアの出版社「L'Artiere Edizioni」コレクションとして刊行。

White Whale's White



山本華

写真家、リサーチャー。千葉県市川市出身。2022年、多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース卒業。日米文化を中心としたリサーチや関東郊外での暮らしを背景に、国境や移動、通信といったテーマを用いた写真作品を制作。過去に写真をはじめ、文章、イベントなど多数。2019年、IMA next #3 ショートリスト入選(審査員：レスリー・A・マーティン)。

surround of the laws (2021)



Ryu Ika

写真作家。内モンゴル自治区生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒業。2018年在学中にパリのエコール・デ・ボザールへ協定留学。2019年第21回写真1_WALL グランプリ。2021年作品集『The Second Seeing』(第二の観察)を赤々舎から刊行。撮影を他人とコミュニケーションの道具として使い、また、写真を創作の素材とし、自己と他者との触れ合い方を探る中で自分の居場所についての思考を写真に纏わるインスタレーションに可視化して提示する試み。

The Second Seeing(2020)写真の森



金秋雨

キュレーター。上海生まれ、東京在住。近年写真と映像の関係性をメインにリサーチする。中日英独翻訳。日本大学芸術学部美術学科助教授、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科博士在籍。2021年から Non-syntax Experimental Image Festival 主催。主要展覧会「Alter-narratives」展(東京藝術大学大学美術館陳列館(Online開催))、「不在此見(Not in this Image)」Kuandu Museum of Fine Arts(台北)、「遭逢の映像(Encounter with image)」静慮藝廊(台北)など。

Encounter with image

中村寛+原田佑馬



左から中村寛編、原田佑馬
中村寛編著『芸術の授業』
原田佑馬『何もある』

dot architects + UMA/design farm

[中村寛] 文化人類学者。アトリエ・アンソロボロジー合同会社代表。多摩美術大学教授。「周縁」における暴力、社会的痛苦、反暴力の文化表現、脱暴力のソーシャル・デザインなどのテーマに取り組む。著書に『アメリカの〈周縁〉をあるく——旅する人類学』(平凡社、2021)、『残響のハーレム——ストリートに生きるムスリムたちの声』(共和国、2015)。編著に『芸術の授業——Behind Creativity』(弘文堂、2016)。訳書に『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』(テリー・ウィリアムズ&ウィリアム・コーンブルム著、大月書店、2010)。

[原田佑馬] 1979年大阪生まれ。UMA/design farm 代表、どく社共同代表。名古屋芸術大学特別客員教授。大阪を拠点に文化や福祉、地域に関わるプロジェクトを中心に、グラフィック、空間、展覧会や企画開発などを通して、理念を可視化し新しい体験をつくりだすことを目指している。「ともに考え、ともにつくる」を大切に、対話と実験を繰り返すデザインを実践。著書に『One Day Esquisse：考える「視点」が見つかるデザインの教室』。愛犬の名前はワカメ。

●タイアップアーティスト



株式会社 The Chain Museum が運営する、アートに出会う機会と、対話を楽しむ場所を提供し、アート鑑賞の「一連の体験をつなぐ」プラットフォーム。著名アーティストから注目の若手アーティストの作品まで、幅広く収録。作品のジャンルも、インスタレーション、絵画、パフォーマンスアーツなど、多岐にわたっている。Sense Island 2022 には石毛健太、中山ゆめおの2名がタイアップアーティストとして参加。



【ArtSticker タイアップアーティスト】 石毛健太

美術家、エキシビションメーカー、他副業多数。2018年東京藝術大学大学院修士課程修了。訪れたことがないので中国地方に一人旅をしたいと最近よく思っている。近年の主な個展に『ニューグラウンド』(東京/The5thFloor/2021)、『アイオン』(秋田/BIYONG POINT/2020)。プロジェクトに SCAN THE WORLD、インストールメンツ、Urban Research Group などがある。

Until September 12



彼ら

【ArtSticker タイアップアーティスト】 中山 ゆめお

1994年東京都生まれ。東京藝術大学 博士後期課程(デザイン)在学中。人間が動物や自然と接している時の感覚や緊張感に着目し、幼少期から続く自身の実体験に基づいた生物や自然の生態と動きをモチーフとした空間を創造している。国内外での旅を作品のためのフィールドワークとし、学びのため狩猟免許や乗馬ライセンスも取得。空間作品や立体作品だけではなく大判フィルムカメラを用いて撮影した写真も発表。自然や動物に目を向け、環境と自然に対する自身の位置付けを考えるきっかけになる作品を作ることを目指している。



HAKUTEN CREATIVE

高橋匠、稲原章太郎、竹塚晃司、諸戸里帆、矢野吉昭、耕平熊崎

「体験」を通じて「感動」と「共感」を創り出すクリエイティブ集団。昨今では、自主的なインスタレーションやアートワークなど 様々なアプローチで体験を拡張し続けている。

Prism (2019) Photo : Akira Arai

●パフォーマンスアーティスト



梅川 壱ノ介

舞踊家。大分県日田市出身。2005年より東京バレエ団に入団、バレエダンサーとしてキャリアをスタートする。2007年、国立劇場歌舞伎俳優養成課に入所、2010年に中村獅童一門に入り、歌舞伎俳優となる。2016年、人間国宝・坂東玉三郎氏との出会いで大きな影響を受け、舞踊家へ転身、「梅川壱ノ介」へ改名する。日本舞踊を基軸とし、国内外での日本舞踊の公演、また古典や現代アート、オーケストラ、絵本と日本舞踊などのコラボレーション舞台を手掛ける。海外での公演や海外文化交流などにも積極的に取り組み、海外での評価も高い。新進気鋭の存在として注目を集めている。

左：Photo：Leslie Kee 右：長唄 静と智盛



エルムホイ

日本とアイルランドにルーツを持ち、独自のセンスで様々な世界を表現するトラックメイカー、シンガー。2015年1st Album「Junior Refugee」をsalvaged tapes recordsよりリリース。映像作品やTVCMへの楽曲提供、ボーカルやコーラスとしてのサポートなどジャンルやスタイルに縛られない幅広い活動を続けている。2018年に小林うてなとjulia shortreedと共にblack boboiを結成。2019年フジロックのレッドマーキーに出演。同年Millennium Parade参加。2021年「DREAM LAND」リリース。今年より石若駿、マーティ・ホロベック、小林うてな、Taikimenを迎えた自身のバンド編成、ermhoi with the Attention Pleaseとしての活動もスタート。MONDO GROSSO、Maika Loubté、Sen Morimoto、東京塩麴など多く作品に関わる。

右：埋立地 photo 藤倉麻子